

2022年9月1日から始まった使徒言行録の聖研は本日が最終回である。

天に上げられる直前主イエスが、「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる」(1章8節)と言われたように、2章で聖霊が弟子たちの上に降ると、彼らは主イエスを伝える証人となって、エルサレムから始まり、ユダヤ、サマリア、シリア、小アジア(今のトルキエ)、キプロス、マケドニア、ギリシャなど地中海の東北地域の至るところで福音を伝え続けた。その記録をこれまで読んできた。その最後として、当時のローマ帝国の首都においてもイエス・キリストの証人パウロが「全く自由に何の妨げもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストについて教え続けた」ことを伝えることを通し、主イエスの伝道命令がローマ帝国の全域にまで広がっていることを伝えている。

前回の27章は、囚人としてカイサリアからローマに護送されるパウロを載せた船が、クレタ島で冬を越すためにフェニクス港に向かう途中「エウラキロン」という暴風に遭い、漂流を続け「ついに助かる望みも全く消え失せようとした」とき、パウロが、神からの天使の話を受け、皆を勇気づけ、結果的に船は難破したが一人も失うことなく無事にある島に着いたところまでを伝えていた。

1-10節

パウロたちが漂着した島は「マルタ」であった。聖書の後ろにある地図「9. パウロのローマへの旅」を参照。この島でパウロの身に起きた一つのエピソードが記されている。蝮に手をかまれたが何の害も受けなかったため、最初はパウロが人殺しの罪を犯したので断罪されると言っていた島民たちがやがてパウロを「この人は神様だ」と言ったという。著者のルカがこの出来事の詳細を記録した意図は何だろうか。ただ奇跡的なことが起こったことを伝えるため? 「蝮」は「蛇」である。聖書において蛇は創世記3章のアダムとエバを罪に陥れた存在、つまりサタンや悪魔を象徴する。それにかまれるということは、その蛇の誘惑に遭うということと理解することもできる。

蝮にかまれたとき何の害も受けず、それを振り落としたことは、パウロの信心深さという点で考えることもできるが、しかし、忘れてはならないのは神さま、主イエスの御計画である(27章23節、23章11節)。ローマで、皇帝の前で主イエスを証する使命をパウロに与えた主なる神さまは、いかなる試練(海の難も、今回の蝮にかまれると言う難も)に遭ってもパウロを守り、御計画を成就なさる。その神に力によりパウロは何の害も受けなかったのである。

7節以下のパウロによる癒しの部分も含め、1節から10節までは、マルコによる福音書16章18節の成就と言える。

11-16節

パウロ一行はマルタ島で3か月滞在しながら冬を越し、エジプトのアレクサンドリアの船に乗ってローマに向かう。その航路は、シチリア島の「シラクサ」（ここで三日間滞在）、イタリア本土の「レギオン」（一日滞在）、二日間かけて「プテオリ」に入港。このプテオリで「兄弟たち」つまりキリスト者たちを見つけ、「請われるままに七日間滞在した」。その後、「アピフォルム」「トレス・タベルネ」を経て、ついに「ローマ」に到着。ローマでは、「番兵を一人つけられたが、自分だけで住むことが許された」（16節）

17-29節

ローマにもキリスト者たちが既にいたが、パウロは「ユダヤ人たちを招き」、彼らに、自分がローマまで護送されるようになった経緯を語り（17-20節）、それに対し、ユダヤ人たちは、自分たちはパウロに対し何の先入観も持っていないと告げる。ただ、「この分派」（キリスト教）については、「至るところで反対があることを耳にしている」と語る。

そのような「ユダヤ人たちは日を決めて、大勢でパウロの宿舎にやって来」、「朝から晩まで」パウロの語る福音の証を聞く。しかし、信仰に入った人は少なく、信じようとしない者が圧倒的に多かったようである。そこでパウロはイザヤ書6章9節から10節の言葉を引用し、彼ら反応は既に預言者イザヤを通して語られているということをつげ、彼らの拒絶ゆえに「神の救いは異邦人に向けられた」と語る。

30-31節

ローマにおけるパウロの伝道だけではなく、主イエス・キリストについての福音はまったく自由に、何の妨げもなく、語られ続けている様子を伝える。それはこの使徒言行録だけではなく、今の、現代の私たちのところまで続く。

聖書には記されていないが、現代の学者たちの研究によると、パウロは二年間のローマでの自宅軟禁（本日の箇所 30-31節）のあと、解放され、その後、恐らく数ヶ月から1年ほどの期間、地の果てと思われていたイスパニア（現、スペイン）にも行って伝道した可能性が高い（ローマ書15章24、28節参照。ついでに記すと、ローマ書は、パウロが第3回目の伝道旅行の終盤コリント《具体的には、ケングレアイ》で書いた。ローマ書15章24、28節によると、パウロがローマに行ったあとイスパニアに行きたいので、その支援を呼び掛けている）。紀元96年頃の『クレメンスの第一の手紙』では「パウロは西の果てに至った」という記述がある。クレメンスは当時世界の中心であったローマに住んでいたため、彼がいう「西の果て」とはイスパニアとなる。